

33. だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。
34. だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。

説教

これはイエスさまが山の上で弟子たちに教えられたことばです。

イエスさまは「あすのための心配は無用です」と言われました。「あすのための心配」は、詳しく訳すと「あすに向けての心配」となります。人間の心配は、結局は「あすに向けての心配」と言えます。それは要するに、自分がこの先どうなるのかといった心配です。自分の生活、仕事、家族についての心配であり、健康の心配、経済的な心配です。ソロモン王の言葉にこういうのがあります。「実に、日の下で骨折った小さいの労苦と思ひ煩いは、人に何になろう。その一生は悲しみであり、その仕事には悩みがあり、その心は夜も休まらない。これもまた、むなしい。」（伝道者の書 2:22-23）人の一生は「悲しみ」であり、「悩み」があるので、「その心は夜も休まらない」というのです。

それでは、どうして人は「あすに向けての心配」をするのでしょうか。理由は、私たちが最も大切にしている「自分の宝を地上にたくわえる」からだとイエスさまは言われます。宝のある所には私たちの心もあり、その地上に蓄えた宝は「虫とさびでできず物になり、盗人が穴をあけて盗む」ため、いつ盗まれるのかと気が気ではありません。「心配」になります。いても立ってもいられません。「全身が暗」くなります(マタイ 6:23)。それで、イエスさまは、「自分の宝を地上に蓄えるのはやめなさい」、「自分の宝は、天にたくわえなさい」と言われるのです(6:19)。

自分の宝を天に蓄える生き方が幸いであることを教えるために、イエスさまは「空の鳥を見なさい」と言われます。鳥は、自分で種を蒔かず、刈り入れをしたり、倉に納めることをしません。人間の文明とは全く関係の無い次元で生きています。人は、種を蒔き、刈り入れ、倉に納めて、それで財をなし、その財を背景により豊かな生活を求めて文明社会をせっせと築いてきました。しかし、それが人を幸せにしたかと言えば事実はそうでなく、むしろ心を地上に縛り付けて暗くします。地上に築いた財産は自分で守らなければなりません。地上には「虫」や「さび」や「盗人」があつて容赦なく襲ってくるので不安でたまりません。金のせいで、人はこの世の「囚われ人」となってしまう。それで、イエスさまは、目を高く天に上げて「空の鳥を見なさい」と言われます。「空の鳥」は、文明社会とは関係無い次元で生きています。金もビルもパソコンも携帯も新幹線も必要としません。つまり、文明など無くても、立派に生きていられるのです。なぜなら、神が養ってくださるからです。私たちは、文明によっていのちを与えられているではありません。文明によって養われているではありません。会社があるから、会社のおかげで、今日もご飯を食べることができるのではないのです。神を知らない多くの人間はそう思って生活しています。金が自分を幸せにしてくれると誤解して生きています。

だから、そのような愚かな私たちにイエスさまは言われるのです。「空の鳥を見なさい。」「空の鳥」は会社に属しているわけでもないのに生きています。金も無いのに今日もちゃんと立派に生きています。

どうしてでしょうか。神が養ってくださるからです。神が直接「日ごとの糧」を与えて養ってくださるからです。それで、何の思い煩いもなく、ただピーチクパーチク神をほめたたえながら、喜んで生きています。神は、小さな鳥でさえ、生かしてくださっているのです。だから、私たち人間のことはもっと気にかけて生かしてくださっています。なぜなら、私たち人間は「鳥よりも、もっとすぐれたもの」だからです。特別に神に愛されています。それなのにそのことがわかっていません。それで、イエスさまは「信仰の薄い人」と呼びます。「信仰の薄い（オリゴ+ピストス）」とは、文字通りには「小さい信仰」です。「小さい」と訳されるギリシャ語「オリゴ」は「オリゴ糖」の語源です。分子が細かくて消化に良いオリゴ糖のように「小さい」のです。つまり、神を信じる信仰があるにはあるものの、しかし「小さい」のです。小さくて見えません。あるのか無いのかわからないほど「小さい」のです。神が自分を愛して生かしてくださっていることまでは現実に信じていないほど「小さい」のです。

イエスさまは言われます。「そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。」(31,32)「異邦人」とは要するに神を知らない人のことです。神を知らない人は、私たちを愛して生かしてくださっている神を知らないで、自分の生活のことで「心配」します。「何を食べるか、何を飲むか、何を着るか」と言って心配します。しかし、それは神を知らないからそうするだけなのであって、神を知っているなら何も心配はいりません。なぜなら、神は私たちの「天の父」であって、「それがみなあなたがたに必要であることを知っておられる」からです。

それでは、何も心配せずにどうせよとイエスさまは言われるのでしょうか。「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」(33)自分の生活を心配せず、「神の国とその義とをまず第一に求めなさい」とイエスさまは言われます。地上の国ではなく「神の国」を求めるのです。「神の国」はより良く訳すと「神の王国」のことです。人間が支配する国は、罪深く、やがて必ず滅びます。しかし、「神の王国」は聖なる神が支配するので、永遠に滅びることがありません。この「神の王国」に入るには何が必要でしょうか。それは「義」です。「正しさ」です。正しい者が天国に入ります。これは、究極、神が恵みによって与えてくださるキリストの義をまもって天国に入ることを意味しますが、ここでは、より正しい生き方、神に喜ばれる正しい生き方を求めよとイエスさまは言っておられます。罪を犯すと、悪魔と滅びの王国が到来します。人は幸せを得ようと金を追求します。でも、そのためには手段を選ばず、嘘をつき、人を殺し、姦淫をし、金のためなら何でもすることになるなら、罪を犯して滅びます。金で天国を買うことはできないのです。この地上に天国をもたらしには、正しく生きなければなりません。神に喜ばれるよう生きなければなりません。そして、このために人は造られました。

それで、イエスさまは「神の国とその義とをまず第一に求めなさい」と言われます。何を食べるか何を飲むかと、自分の生活の心配で一生を終えてしまうのではなく、「神の国とその義とをまず第一に求めなさい」と言われます。そうすれば、「それに加えて、これらのものはすべて与えられます」と言うのです。つまり、神のために生きる時、神は一切の必要を満たしてくださるとイエスさまは約束なさいます。なぜなら、飲む物、食べる物といった「日ごとの糧」は、そのためにあるからです。すなわち、「神の国とその義」のためにあるのです。私たちは、死にたくない死にたくない、生きたい生きたいと、往生際悪く、「何を食べようか、何を飲もうか」と、それこそ生きるために「あすを思い煩う」のですが、そういう愚かな私たちに、イエスさまは、「生きようと思うな、死ぬ、御国を目指せ！」と命じ、「神の国とその義とをまず第一に求める」者に、「必要な一切をわたしが満たす、安心して行け！」と約束なさるのでした。

「だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に十分あります。」(34) イエスさまは「あすのための心配は無用」と言われます。私たちの「天の父」が養ってくださるからです。だから、私たちのなすべきは、天の父の恵みに応えて、感謝して、天の父を喜ばすこと、それだけです。自分の生活の心配をすることではありません。どんなに心配しても「自分のいのちを少しでも延ばすこと」などできません(27)。むしろ、心配し、鬱になって、寿命を縮めるだけです。だから、心配してはなりません。少しも心配してはなりません。「あすのための心配は無用です」。「あすのための心配」は不信仰です。「あすのことはあすが心配します」。あすのことはあすが心配すればいいのです。つまり今日は心配する必要がありません。これは実に傑作な表現です。いつまで経っても「あす」は来ません。来る日も来る日も「今日」なのですから、要するに永遠に「心配」する必要はないのです。

そして、「労苦はその日その日に十分あります」。心配は「あす」に委ねて、「その日その日」すなわち「今日」なすべきつとめは「今日」「充分にある」のです。「あす」のことを心配している暇など少しもありません。「労苦」と訳されている言葉は、元来は「悪意、邪悪」の意味で、「問題、トラブル、不幸」のギリシャ的な言い回しでもあります。毎日、悪いことが降りかかってくる。毎日、悪魔の試みがあり、トラブルが、問題が、襲いかかってくる。そうした中で、「あすに向けての心配」に囚われて、お先真っ暗となり、遂には人生真っ暗となってしまいます。だからこそ、イエスさまは、「あすのための心配は無用」と言われます。あすのことはあすに委ねて、「今日」に集中せよと言われます。「今日なすべきことが充分にあるじゃないか」と言われます。今日なすべきこと、それは「神の国とその義とをまず第一に求める」ことです。私たちは、次から次へと日々襲いかかる悪いことの渦中であって、義を行わなければなりません。そうやって、神の支配、神の王国をこの地上にもたらさなければなりません。何が神に喜ばれることかをしっかりと見極めて、精一杯全力でみこころを行うことなのです。